

今に、居てしまう、えんなかの滞在拠点

景色を楽しみ、食を味わい、同じ時間を過ごす
 気づいたら関係がはじまり、つながりが続いている。
 そんな風景をつくります。



提案 ~同じ時間の中に身を置く~

本拠点は、珠洲市への移住を検討する人が、暮らしを決める前に実際の時間を体験するための滞在の場である。明確な目的を持って訪れる場所としてではなく、ただそこに滞在し、地域の人や自然と同じ「今」の時間に身を置くことで地域とつながり始める滞在拠点である。

珠洲市二子地区

~集落のまわりの田畑と共に暮らしが成り立つ里山集落~



二子は、畑や稲作、といった営みが今も日常として続き、人の生活が自然のリズムに強く結びついている。ここでは「今日の天気」「山の色」といった“今”の感覚が、暮らしの中に根付いている。

「えんなか」を中心とした関わり



参考：写真集 奥能登

いろりを奥能登では「えんなか」といい、冬から春にかけて長い屋内生活での団欒の場となっていた。

このえんなかを中心として設計を行う。火や天候、食事や会話といった環境を媒介に、等しくその場に居合わせる関係が生まれる。そこでは地域も人も同じ時間を共有する場となる。

おためし滞在記

朝、お隣さんのしずこばあちゃんの野菜収穫のお手伝い。

畑で抜いた大根をえんなかに吊るす。「こうして干すと甘くなるんや」と教えてもらいながら、並べ方を真似する。



収穫した大根は干しておこう

昼下がり、台所で大根の使い方を聞く。煮る順番、火加減、味見のタイミング。おいしい作り方は、言葉より手つきで伝えられる。

失敗してもいい、と笑われる。



おいしい作り方を伝授

夕方、山がやわらかく夕日に照らされ、畑の向こうが金色に染まる。

夜、えんなかに火が入る。

外に出なくても、空の気配がわかる。

星明かりが屋根越しに差し込み、

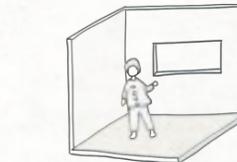
「今日はよう見えるな」と誰かが言う。

火を囲み、星の話をしながら、同じ時間を共有する。

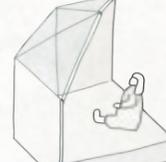
二子の「今」を享受できる空間

二子固有の「今」 | 朝日が差し込んで目が覚める | 夜にはっきりと見える星 | 地域の方との素直な関わり

取り入れる空間要素



山並みを見渡せる横窓

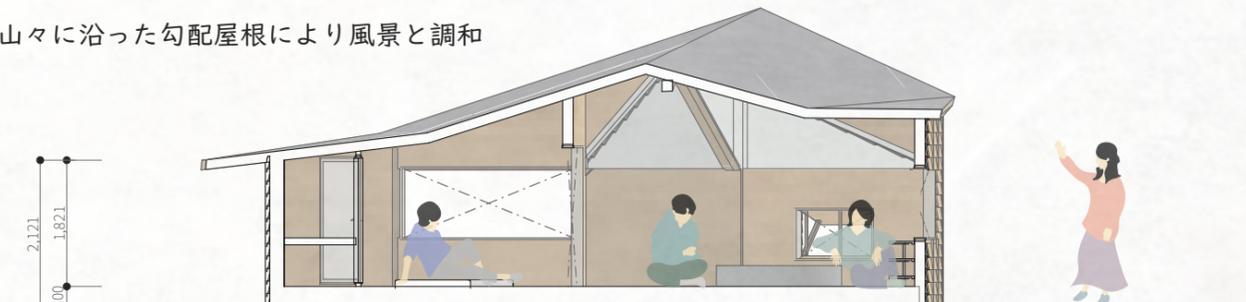


室内か星を眺めることが出来る天窗



話し込める囲まれた空間

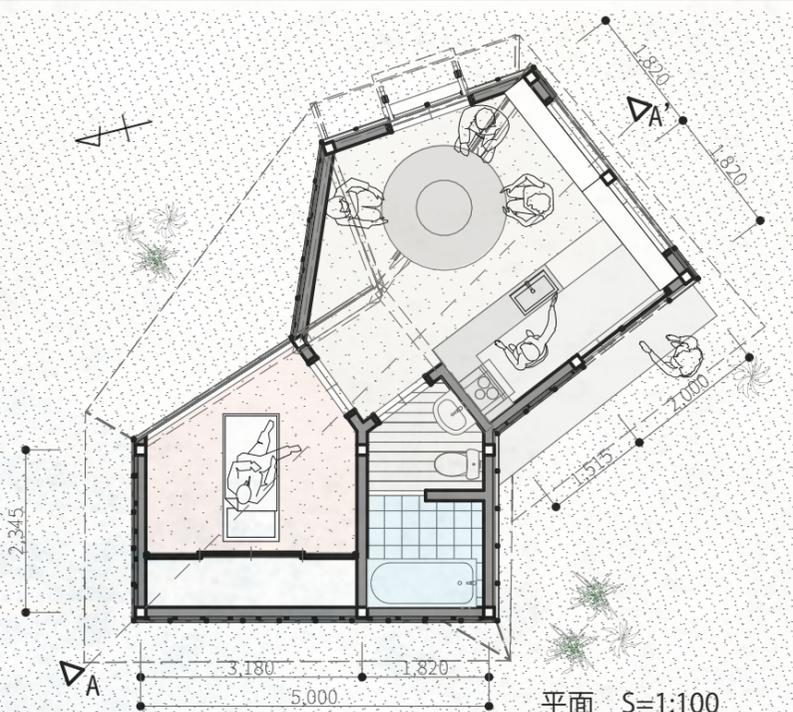
山々に沿った勾配屋根により風景と調和



A-A' 断面 S=1:100



星に照らされて「えんなか」を囲む



平面 S=1:100